

第54回技術士のタベ

「住民目線のリスクコミュニケーションを考える③ 福島現状と技術士の具体的役割」

日時：2017年3月3日（金）18:00～20:00

場所：日本技術士会荻手第2ビル5階AB会議室

進行：山田基幸（原子力・放射線部会 幹事）

参加者：20名（講師含む）

1 はじめに（趣旨説明）（佐々木 原・放部会長）

- ・これまで「住民目線のリスクコミュニケーションを考える」のテーマで2回、講演、ロールプレイを実施した。前回の結果から、技術士として何を行うのかという点の深掘りした議論が必要との結論となり、その結果を受けて今回の企画を検討した。
- ・福島の内外において異なる問題がある。県内では、県内の地域差の問題や原子力だけでなく増えてきている問題があり、福島県外では福島のイメージが止まっている。福島県外であっても情報の入手は可能と思われ、見ていないだけかも知れない。
- ・防災支援委員会は、阪神淡路震災後20年にかけて技術士の活動のあり方を検討し、取り組んだ。原子力・放射線部会として十分な取組みが出来たかどうか反省する必要がある。
- ・ポストクライシスの今こそ考えるべき課題を取り上げ、同じ問題認識を持った様々な人達と連携して外に向かって発信していくことが理解や協力を得る上で必要と考えている。
- ・今回の企画では、福島県外にいる専門家としての技術士の役割に係るテーマでグループ討議を行い、これからの行動のヒントが得られるものにしたい。

2. 講演概要 —福島からみたリスクコミュニケーションの課題—

越智小枝氏（相馬中央病院 内科医長）

- ・医学におけるリスク選択は費用対効果や治療の効果を個々人に対して判断するが、公衆衛生学におけるリスク選択は個々の症例よりも社会全体の相対性をみている。
- ・健康は医療だけで達成されるのではなく、ライフスタイル（教育、食べ物等）と関連する。
- ・全てのもの技術も防災も、人々の健康が目標といえる。
- ・今回の震災から、社会的リスクも含めた安全性を考えるべき。
- ・技術の安全と社会的リスクも含めた安全性にはトレードオフの関係がある。
- ・1F事故後、避難区域内の逃げ遅れにより、食料がなかったや治療が受けられなかったとの事例があった。



- ・屋内退避者には外部からの医療資源等が入らない等の流通がなくなり、交通弱者や情報弱者が取り残され、避難に対する準備不足も起きたことにより結果して亡くなった事例があった。
- ・農作業の従事者では運動不足の習慣が元々ないことが多く、住環境としては郊外の仮設住宅であるために車を利用すること、保存食品中心の食生活の変化等により、肥満や糖尿病は増加し健康状態が悪化している。
- ・弱者の同定が必要、また交通・情報・医療のインフラを強化できないかと考える。
- ・住民の介護度等の健康情報を共有することで、災害時には薬難民を減少でき平時には遠隔医療にも有効になると考える。
- ・福島の防ぎ得た健康被害（逃げ遅れ、慢性疾患の悪化、薬難民）の対策は医療関係者だけでは困難で、行政や企業等いろいろな職業の人と協力して達成できるものである。
- ・原子力の深層防護第5層の次に、放射線だけでなく人への健康を守る第6層が必要ではないか。
- ・リスクの目的もまた人の健康にあり、放射線や原発の知識を得ることで身を守ることに繋がるためといえる。
- ・未来を住民が選べることがリスクの前提として必要であると考え
- ・リスクには、正確な情報の入手（リスクを知る）、関係者間で共有（リスクを説明する）、意思疎通（リスク感覚を分かる）、合意形成（リスクを減らす）の4つの要素がある。
- ・傾聴、意見を押し付けないといったことはコミュニケーションマナーであってこれ自体はリスクではない。また相手の立場に立ってというが胡散臭く受け止められないかとの懸念も生じる。
- ・リスク比較は論理や科学だけで単純解決できない。
- ・正確な情報について、放射線の量といった数値だけでなく他のがんのリスクを比較のためには必要という幅のある面的な情報が必要。また、統計でなく個人のデータも事実であるので正確な情報であり否定はできない。
- ・関係者間での共有について、ステークホルダーの言葉、専門用語で説明することは時には必要、また解釈のための情報共有等も必要になる。
- ・意思疎通について、ブレインストーミングによる結論づけない議論が最初に必要で、最初に論理やディベートがなされるとうまく進まない。
- ・合意形成について、何のリスクを減らそうとするのか、何に対する合意なのかの明確化が必要になる。
- ・何が分からないのか明らかでないのかを、明確にすることは専門家の役割である。
- ・専門家としての正しさと人としての正しさ、理性のバランスが専門家には必要である。
- ・今後のリスクには、福島からきちんと学ぶこと、個人のメリットを重視した議論、理屈だけではないことを生み出すためのたたき台となる議論を期待する。

3. グループ討議

3. 1 グループ討議の要領

専門分野（部会）、前年度の参加有無などから、5つのグループに班割し、グループ毎に次のいずれかのテーマを選択して討議した。

- ① 福島県内の住民目線の状況を情報入手するにはどのような方法があるのか
- ② 情報を分析したうえで、福島県外の対象者（一般、技術士、行政等）別に、情報発信するにはどのような方法があるのか
- ③ 県外の人々が正しく判断するためには知識（放射線・原子力・除染等の技術的知識や福島県の社会経済的実情・生活関連等の現状に関する知識）の付与が重要であるが、どのような方法があるのか
- ④ 技術士会等のネットワークの活用策にはどのようなものがあるのか

3. 2 グループ討議の結果

（A班：テーマ②）

- ・原子炉や放射線のリスクを定量化して伝えるときに何を工夫するのかといった議論や分かってこない場合もあるが、リスクの定量化に努めることが技術士の役割との意見があった。
- ・リスクを伝えるには顔を突き合わせての対応が求められるとの意見があった。

（B班：テーマ②）

- ・実経験を交えた議論の中で、講演会や他部会へのCPD行事を利用した発信等の方法があげられたが、やはり顔・様子を見ながら講演等を行うことが重要との意見があった。

（C班：テーマ③）

- ・直接接触するのではなく、その地域の方で一定の知識を持った人を通じて話をするのが良いのではないかと考え、地方の技術士や理科の先生への協力、アプローチができないか、分かりやすくするためにパンフレットの作成に関与してはどうか、非常勤講師等で教育現場のある誤った情報を正してはどうか等の意見があった。

（D班（原子力・放射線を専門としないメンバーで構成）：テーマ②）

- ・情報発信のテーマであったが議論としては情報入手方法の難しさに意見が集中した。
- ・情報発信については、技術士会内でプロジェクトチーム化しての対応やマスコミ向けの記者勉強会が考えられないか、技術士会のネットワークが有効であり個人としての発信は難しい等の意見があった。

（E班（原子力・放射線を専門としないメンバーで構成）：テーマ④）

- ・行事を通じて技術士が外から信頼される者であることを示すこと、そのために普段から見せ続けていくことが必要で、様々な部会の集合体として活動することが必要との意見があった。
- ・原放部会から他部会に積極的に連携を求めるべきであったのではないかと、また平時か

らそうすることで技術士全体としての活動ができるのではとの意見があった。

3. 3 越智先生の講評

- ・技術士が何を出来るのかを知らない人がほとんどではないかと思われる。
- ・様々な部会があることで、何かあれば頼めるというイメージが浮かぶようなアピールを普段から行うことが大事である。
- ・住民目線という意味で、暮らすための情報という視点で、コミュニケーションできるようにすることが大事になる。

以 上